

創立60周年
since 1962

東京バッハ合唱団 月報

[第 717 号] 2022 年 3 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.717

March 2022

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

創立 60 周年記念企画 “この 60 年を振りかえる” 第 3 回

第 1 回定期演奏会、バッハ・ゼミ、シュヴァイツァー・ゼミ

大村 恵美子 (主宰者) / [編集部補注]

創立 (1962 年 7 月) の年も改まって、2 年目の活動が始まりました。

1963 年

- ・ 2 月 25 日 (月)、磯谷 威 (*1) の発声練習、始まる。
- ・ 4 月 13 日 (土)、第 1 回定期演奏会 (*2)、バッハ合唱団主催、弓町本郷教会、指揮：池宮英才。
- ・ 4 月 22 日 (月)、第 1 回バッハ・ゼミナール (*3)、バッハ合唱団主催、講師：深津文雄 (*4)、銀座美術家会館。
- ・ 6 月 15 日 (土)、第 2 回定期演奏会、弓町本郷教会、指揮：小林道夫 (*5)。
- ・ 7 月 27 日 (月) ~ 30 日 (木)、野尻湖合宿。以後、毎年 3 泊 4 日の合宿を続ける。
- ・ 12 月 7 日 (土)、第 3 回定期演奏会、立教大学礼拝堂、《クリスマス・オラトリオ》前半 3 部、指揮：小林道夫。

*1) 磯谷先生 (声楽家) は、当時、群馬大学教授で東京芸大などの講師も兼ねていらした。豊かな人格とユニークな教授法で、発声にとどまらず、多くの精神的な富も残してくださった。*2) 第 1 回定期演奏会は BWV 84 と 182、三宅春恵 (S) や芳野靖夫 (B) などの実力派を起用。*3) バッハ・ゼミは、第 1 線の講師をお招きし、バッハについて学ぶ企画。月 1 回、練習後に開催。後に、西武百貨店スタジオ 200 での連続レクチャーコンサート (1981-82, 85) に発展したものです。*4) 深津文雄牧師 (1909-2000) は、千葉県館山市に「かいた婦人の村」を創設し、婦人保護に努めるかたわら、バッハ音楽の普及にも貢献された。*5) 小林道夫先生は、主宰者の芸大楽理科の 1 年後輩、カンタータを学びたいから、と毎回の指導を申し出てくださった。以降、1975 年まで 10 数年、ふだんの練習指導と本番指揮とで、当合唱団の礎を築いてくださった。今も九州にご健在で、東京での《ゴルトベルク変奏曲》公演は年末の恒例となっています。

1964 年

- ・ 5 月 23 日 (土)、第 4 回定期演奏会、立教大学礼拝堂カンタータ BWV 104、158、6、指揮：小林道夫。
- ・ 7 月 12 日 (日)、第 1 回シュヴァイツァー・ゼミナール (*6)、講師：東川清一、その後、角倉一朗と交替。

1965 年

- ・ 6 月 28 日 (月)、週 2 回の練習のうち、月曜は今後、

第 121 回定期演奏会 (創立 60 周年記念公演)

後援会員・団友のみなさま、ご招待

[日時] 2022 年 5 月 14 日 (土)、14:00 開演

[会場] 杉並公会堂大ホール

(JR 中央線/総武線/東京メトロ丸ノ内線「荻窪駅」北口 7 分)

※曲目、演奏者、他詳細は、同封のチラシをご覧ください。

後援会員、団友のみなさまには、このパンデミックの 2 年半、温かくお支えいただき、ご声援を送りつづけていただきました。心より感謝を申し上げます。

来たる 5 月の公演は、この間の知見を活かし、細心の感染対策をもってお迎えすべく準備を進めています。ぜひともご来聴いただき、私どもの創立 60 周年を、ご一緒に寿いでいただけますようお願い申し上げます。

当日は、この月報に同封の「招待状」をご持参ください。会場受付にて座席券と交換のうえ、ご入場いただけます (席は充分に用意)。お仲間お誘いでお越しただければ、なお幸いです (ご同伴者はチケットが必要。詳細は招待状に別記)。

目白聖公会 (18:30-20:30) と固定する。もう 1 回はこれまでの日曜を土曜に変えて、世田谷区桜上水の森井宅でつづける。

1966 年

- ・ 5 月 1 日 (日)、仙台特別演奏会、仙台ヤマハミュージックセンター、指揮：長谷川朝雄、エレクトーン：木村一子。
- ・ 10 月 2 日 (日)、葉山教会の礼拝で BWV 131 合唱。
- ・ 12 月 20 日 (火)、第 10 回定期演奏会、都市センターホール、《クリスマス・オラトリオ》全曲、指揮：長谷川朝雄。

1967 年

- ・ 7 月 1 日 (土)、創立 5 周年記念懇親会、本郷学士会館。
- ・ 11 月 5 日 (日)、板橋カトリック教会特別演奏会、《マニフィカト》BWV 243、指揮：小林道夫。

1968 年

- ・ 10 月 19 日 (土)、甲府特別演奏会、山梨英和女学院、カンタータ BWV 1、《クリスマス・オラトリオ》他、指揮：小林道夫。

月報 2022 年 3 月号 CONTENTS

- ・ ソナス・ファベールと犬とバッハと (千葉光雄) …p. 2
- ・ 〈ゲーム感覚〉の人生 (大村恵美子) …p. 2-3
- ・ バッハカンタータの場景⑨ 日本語版の完結計画 …p. 3
- ・ 連載：退屈するのはいそがしい [13] (大野博人) …p. 4

1969年

・7月1日(火)、創立7周年記念懇親会、桜上水練習場。

1970年

・10月10日(土)、第20回定期演奏会、東京文化会館小ホール。カンタータ BWV 100、39、140、指揮：小林道夫。

1971年

・9月20日(月)、第22回定期演奏会、モテット2、5、1。25日(土)、第23回、モテット3、4、6、いずれも指揮：小林道夫、杉並公会堂。

1972年

・7月1日(土)、創立10周年祝賀会、神田学士会館。『月報抄』発行。

*6) シュヴァイツァー・ゼミは、当初、講師の持参するLPレコードを鑑賞しながら、シュヴァイツァー著の『バッハ』を読み、解説をうかがった。【つづく】

ソナス・ファベールと犬とバッハと

千葉 光雄 (団員) [右写真も]

昨年夏の終わりに思い切ってスピーカーを新しくした。イタリアのソナス・ファベールのエレクタ・アマトルⅢ(長い名前!)だ。声と弦の響きが美しいと評判のスピーカー。妻のすすめもあり、これからの長くない余生、残されたたくさんのLPやCDを聴くためにと……。

しかし直後から、我が家の愛犬の病状がどんどん悪化。3年前に脳梗塞、2年前の腎臓病と2回も死の淵からなんとか回復してきたが、もう18歳半を過ぎ、獣医からはこれからは1週間単位です、と言われてた。一生懸命介護したが11月、とうとう私の腕の中で天国へと旅立っていった。その感触、その時の場面がいつまでも脳裏を去らない。いつかはと……。

私にとっては本当に大事な犬だった。いつでも私のそばにいていつでも一緒に出かけたかった。写真が好きな私は休みになると近所の公園や土手、花のきれいな所に散歩に行き、花を撮っていたが、いつでもじっと足元で待っていてくれる優しい子だった。その子が突然目の前からいなくなるとは。

それからは、あの子との毎日の散歩道が辛くて通れなくなった。ときどき私を呼ぶ声も聞こえるし……。そしてせっかく新しいスピーカーを導入したのに、まともに聞けなくなった。何を聞いても耳を素通りする、うるさく聞こえ、煩わしくなり、途中で止めてしまうのだった。大好きだったモーツァルトもダメだった。

モーツァルトが本当に好きで日本モーツァルト協会にも長いこと入会していて、毎月例会(内外の演奏家によるモーツァルトだけの音楽会)に通っていたのに。そんななかで聞けたのはバッハだった。「平均律」

◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm



■新しいスピーカー(右)と犬とリヒテルのCD(下)

[筆者・バス団員の千葉氏は、毎号の月報紙面に、季節折々の植物や風景の写真を提供くださっています。新しい写真を楽しみにお待ちしています。編集部]

の数曲とヴァイオリンソナタの1曲だけ。夜更けに小さな音量で聞くそれらの曲は心にしみた。

リヒテルの弾く「平均律クラヴィア曲集 第一巻」の第1番の前奏曲、第8番の前奏曲とフーガ、そして第24番の前奏曲とフーガだ。第1番はグノーのアヴェ・マリアに編曲され有名な曲。夜明け前の海のかなたからひたひたと寄せる波が、ゆっくりと足先から体全体をいつの間にかやさしく包んでくれる。第8番は広大な空間を静けさと崇高さが満ち、聞いているだけで神を感じる曲。第24番は第一巻の終曲。たんと進む通奏低音に乗り、美しい旋律がどこまでもどこまでもつながり流れていく。いつまでも聞きたいと思う曲。この演奏はリヒテルのピアノしかない。もう1曲は「ヴァイオリン・ソナタ第5番、ヘ短調」(BWV1018)の第1曲。悲しいような懐かしいような不思議な曲。夜更けて聞いていると胸がいっぱいになり、自然と涙がわいてくる。ぜひ寺神戸亮(vn)とヘンステラ(hp)の演奏で、みなさんもお聞きになってみてください。

もうじきあの子(犬)の大好きだった春。今は写真撮影に出かける気力がなけれど、このままではあの子に笑われてしまう。またカメラを担いで、あの子と一緒にのつもりで桜並木の公園を歩けるようになれば、美しい花々を、風景を撮ってあげたいと思う。そしてソナス・ファベールのスピーカーでモーツァルトを、そして何よりも私を支えてくれたバッハを、浴びるように聴けるようになりたいと願っている。

みなさん、やはりバッハは素晴らしい! バッハはどんな時にも聞けますよ!

〈ゲーム感覚〉の人生

大村 恵美子

創立の時から始めて今日まで、月ごとに月報を発行して、独りよがり制し、外部からの反響を重んじながら、人生を辿ってきたことは、私にとって、それが

生き方として普通のことになってしまいました。他の方々の中には、非常に独自性に富んでいて、オリジナルで貴重な存在なのだなあ、と感銘することもあります。当のご本人にとっては、何にも外に向かって求めようもしないの、特に他人など、居ても居なくてもいいような関係なのでしょう。

日々の中で、私本人に限らず、外側から褒められた、いやがられた、どなられた——等々の影響は、そのまま自分の人生の内容となって蔽いかぶさります。「いいね」の投げかけがあると、心はずんで、もっと外に見えるようになるまで行なったりする。相手から避けられるようだ、こっちの態度もすぐに、自分をきびしく批判してみる。どなられっぱなしの家族の中で過ごす、こそこそ人前から遠ざかったり、麻痺状態ぶって知らん顔で居座ったり、逆切れで相手に猛然と立ち向かい、自分も同じようにどなり返し、暴力沙汰にさえ及んでしまったりする。とにかく相手がまず仕掛けたのだから——というのが絶対の反発理由。

私自身は、基本的には、静かな場に位置して、ひとりで黙々と行為・思索・遊びをたのしむのが好きだが、それだけでは済まないこともあり、他人から何かと持ちかけられたり、こちらから外に出かけて行って、話し合い、呼びかけ合い、接し合うことも、程々に行なう。自他双方のこのような在り方全体を、私は〈ゲーム感覚〉のゆるさで把えて、どんな時でも、自分にムキにならず、他人をおとしめず、あれやこれやの策・方法を使役しながら、何とか続けてゆく。ひとから特に拍手もされず、逆にうとまれもせず、その場その場で、微笑をもって迎えられる。そんな人生だったら、50年が100年になり、120年になろうと、けっこう楽しいのでは？ つまり、〈まじめ〉な人々からは軽蔑されるかも知れない、私なりの〈ゲーム感覚〉、〈かけ引きのある〉興味深い人生に思われるのです。とにかくこの3月9日には、私ごとながら、いやでも嬉しくても、もう91歳となってしまうのです。

【既刊楽譜】作曲アイデアの素材から見渡してみる

バッハ・カンタータの場景 №9

大村 健二 (団員)

ブライトコプフ日本語版の完結計画

われわれの刊行した、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル版底本による「日本語版バッハ・カンタータ楽譜選集」の中から、既刊の曲目を少しずつ紹介してきました。

5月予定の60周年記念公演の演目3曲(BWV 21、1、147)を紹介し終えたところで、いま教会暦は、キリストの受難を想うレント(四旬節)の期間に入ります。復活祭(今年は4月17日)前の、日曜日をのぞく40日間を信者は慎みをもって送ります。バッハの時代の

ライブツィヒなどでは、礼拝のなかでの音楽演奏も控えられました。したがって、この地でのバッハは、復活節前第6週から第1週までの6週間の日曜日のためのカンタータを残していません。例外として、毎年3月25日に固定された「マリアの受胎告知の祝日」が、この期間にめぐってきた場合には、気合を入れた作品が生まれました。このたびの演目 BWV 1、カンタータ第1番《あしたに輝く妙なる星よ》が、まさにそれ。

それはそれとして、ちょうど今が歌舞音曲を慎む斎戒期というわけで、既刊楽譜の紹介からも離れさせていただき、この欄をお借りして、今年から予定されている大きなプロジェクトの宣伝をさせていただこうと思います。

大村恵美子・個人完訳『日本語版バッハ・カンタータ楽譜全集』(全192曲予定)、完結10年計画をスタートさせようとしています。人間の品性として、大きな仕事は完了した暁に騒ぐものですが、一つは退路を断って取り掛かることにしたこと、もう一つは訳詞者・主宰者の齢を考えてのこと、お許しください。

これまで「楽譜選集」と名乗っていたものを「楽譜全集」と改めます。

■計画第1年次(2022年)全12曲

- ①第2番「天より 見そなわし」Ach Gott, vom Himmel sich darein BWV 2 (三位一体節後第2日曜日)
- ②第3番「しげき悩み いま われを襲いきて」Ach Gott, wie manches Herzeleid BWV 3 (顕現節後第2日曜日)
- ③第5番「いずこに われ逃れゆかん」Wo soll ich fliehen hin BWV 5 (三位一体節後第19日曜日)
- ④第7番「ヨルダン河に 主イエス来たりて」Christ unser Herr zum Jordan kam BWV 7 (洗礼者ヨハネの祝日)
- ⑤第9番「救いは臨めり」Es ist das Heil uns kommen her BWV 9 (三位一体節後第6日曜日)
- ⑥第10番「わが魂 主を崇め」Meine Seel erhebt den Herren BWV 10 (マリアのエリサベト訪問の祝日)
- ⑦第11番《昇天節オラトリオ》Himmelfahrts-Oratorium BWV 11 (昇天節)【当全集ではカンタータとして扱う】
- ⑧第12番「泣き 歎き 憂い 迷い」Weinen, Klagen, Sorgen, Zagen BWV 12 (復活節後第3日曜日)
- ⑨第13番「ため息 涙は尽くることなし」Meine Seufzer, meine Tränen BWV 13 (顕現節後第2日曜日)
- ⑩第18番「み空より 雨 雪降り」Gleichwie der Regen und Schnee vom Himmel fällt BWV 18 (復活節前第8日曜日)
- ⑪第20番「いかづちの言葉 おお汝 永遠よ」O Ewigkeit, du Donnerwort BWV 20 (三位一体節後第1日曜日)
- ⑫第22番「イエス 十二弟子よびて言いたもう」Jesus nahm zu sich die Zwölfe BWV 22 (復活節前第7日曜日)

以後、毎年12曲ずつ刊行、10年で完結の予定です。上の初年度の曲目をご覧ください。何でこんな名曲が今まで未刊だったのか、と不審に思うほどでは？ 次号以下に随時、計画の概要にも触れます。

雪は降る、あなたは……

安曇野閑人 大野 博人

2月半ば、テレビが首都圏の大雪ニュース一色になった。

大雪警報も出た。電車が運行を見合わせ、高速道路の入り口も閉鎖された。街頭に出たレポーターが、街頭で苦労して通勤する人たちの話を伝えている。

スタジオのアナウンサーが視聴者に呼びかける。

「今は外出しない方がいいでしょう。とくに車で出かけるのは控えましょう」

大変だなあ。

「雪はすでに数センチ積もっています」

ん？ 数センチ？

「道も凍結しています。とくに橋の上などは危険です。滑って転倒しないようペンギン歩きを心がけましょう」

なんだ、これ？

拙宅の窓の外には深さ30センチくらいの雪におおわれた雑木林が広がっている。私は、そこをよちよち歩くペンギンの群れを想像してみた。バッハのヴァイオリン・パルティータ3番のガヴォットが似合いそうだなあ、なんて思いながら……。

安曇野に移り住んで思い知らされることの一つは、東京中心に大きく偏った情報の流れだ。たしかに首都や大都会の交通がマヒすると困る人は多いし、経済にも影響が出るだろう。とはいえ、全国ニュースで歩き方まで指南するなんて。文字どおりの「手取り足取り」。

新聞社の元同僚で、地元の山形県に戻りフリーでジャーナリスト活動をしている友人がいる。安曇野よりずっと雪深い山間の町に暮らす彼は、東京からのニュースに怒っていた。ネットに出した記事でこう書いている。

「東京に数センチの雪が降り積もれば、かなり大変なことだとは分かる。が、それを気象庁が『大雪』と表現し、報道機関が『大雪』と報じるのは、日本語の使い方としておかしいのではないか。『積雪注意報』『東京で積雪』で十分ではないか。雪国で暮らす人たちがこういう報道をどういう思いで見ているか、まるで考えていない」

同じころ、山形県内では屋根に積もった雪で家がつぶれ、高齢の一人暮らしの男性が亡くなる事故があった。足が不自由だったという。けれども、それはNHKではローカルニュース扱い。それもあって「東京の大雪報道」にがまんならなかったようだ。

自分に身近な出来事かどうか、知っている街や人の話かどうか。これが情報への興味や関心を大きく左右する。情報を提供する側もたくさんの人に見てもらいたい、読んでもらいたいと思えば、その関心に焦点を

合わせる。かくして都会中心のニュースが幅をきかせることになる。

でも、時代が変わる兆候は、たくさんの人が住む都会に最初に現れるとはかぎらない。1989年の冷戦体制崩壊をいち早く告げたのは、東側から田舎の国境地帯を抜けて西側に逃げ出し始めた市民たちだった。2007年に起きた英国の地方の金融機関の信用不安は、1年後のリーマン・ショックを予告していた。

日本でも急速に若者がいなくなっている地方には、都会よりも早くから危機感をつのらせていた人が少なくない。隣町の役場に勤めていた友人は、人口動態や環境の問題についてのグローバルな視点から地元の将来を考え続けている。

安曇野に定住を始めてまだ2年の私は、雪景色を新鮮に感じるけれど、ずっと前から住んでいる人たちは、積雪量は減ってきていると口をそろえる。

変化は冬だけではない。地元の家電量販店の店員の話では、クーラーを購入する家が増えているらしい。ここは夏が涼しい。今でも日が暮ればクーラーはいらない。ただ、陽ざしの強い午後は扇風機だけではつらい。けれども、それも近年のことだという。

花や野菜の生育からも気候が少しずつ変わっていることを、ここで暮らし続ける人たちは感じとっている。私も「季節のない」都会に暮らしていたとき、気候変動を頭では理解しても、五感で感じることはあまりなかったように思う。

時代の変動をいち早く知りたければ、新宿や渋谷でペンギン歩きしている場合ではない。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■庭先の雪の雑木林 (写真提供と説明も筆者)

[編集後記]

・3月11日が近づき、2011年の激震を想い起こします。今はパンデミックが世界を覆うなか、不安に駆られながら2020年から2022年に至ります。あの時も今も、自然の脅威の前に、さんざん人間の無力さが語られました。

・2022年2月24日から十日、またも人間の無力を思い知らされています。いっそうタチが悪いことに、今度は、人間の脅威の前の。……白い雪がただ降るばかり。